

令和7年度 霞ヶ浦学講座「中世の霞ヶ浦」実施報告

実施日時：令和8年3月8日（日）13:30-15:00

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：比毛君男 氏（上高津貝塚ふるさと歴史の広場 副館長） 参加者数：27名

テーマ：「中世の霞ヶ浦」

講演概要

霞ヶ浦は、奈良時代の頃は「流海」と呼ばれたように、時代とともに名称（呼称）がかわってきました。また、海の入江から次第に湖へと変化してきました。

本講座では、奈良時代に編纂された常陸国風土記をはじめとし、古代から中世にかけての古記録・古文書、考古資料をもとに中世の霞ヶ浦の姿を探りました。

【講師資料より】

古代から中世の古記録・古文書に見る霞ヶ浦

常陸国風土記（地誌 奈良時代、現存は常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の5つ）

「信太郡」「茨城郡」「行方郡」などの記述の中で霞ヶ浦が「流海」と呼ばれていたことが記されています。

「信太郡」 「東は信太の流海、南は榎の浦の流海、西は毛野河、北は河内の郡也」

「茨城郡」 「東は香島の郡、南は佐我の流海、西は筑波山、北は那珂の郡也」

「行方郡」 「東・南・西は流海、北は茨城の郡也」

今昔物語集（説話集 平安末期）

平忠常が源頼信に攻められた際の記述に「此の海には、浅き道堤の如くに、広さ一丈許にて直く渡りけり。深さ、馬の太腹になむ立つなる。」とあり、霞ヶ浦が「海」と記されています。

霞ヶ浦を詠んだ和歌

霞ヶ浦を詠んだ和歌は多く存在しますが、ほとんど都人が都で詠んだものであり、実際に常陸に来て詠んだものは少ないと考えられます。

・『貧道集』（藤原教長歌集 平安時代）

作者は、常陸国信太郡浮島に配流され、後に帰洛しています。

「いたらんするところは、したのうきしまとなんまうすうみのほとりに、ふねにのりけるときによめる」とあります。当時、島であった「浮島」についてふれられています。

潮来市長勝寺銅鐘の銘（長勝寺は、源頼朝創建と伝えられています。銅鐘は国指定文化財）

銅鐘に「客船夜泊 常陸蘇城」と刻まれています。当時の中国の繁栄都市・蘇州になぞえられており、潮来が交易などでにぎわっていたことがわかります。

神皇正統記（史書 南北朝時代）

北畠親房が漂着時の際の記述に「同じ風のまぎれに、東をさして常陸国なる内の海につきたる船はべりき」とあり、霞ヶ浦が「内の海」と呼ばれていることがわかります。

海夫注文（「香取大禰宜家文書」 鎌倉時代）

香取神宮の大禰宜が支配した海夫に関する文書でこの中では、下総国と常陸国に属する津（港）名と知行者名を列挙した文書になります。霞ヶ浦・北浦側で合計 53 か所、下総国側で 24 か所の津の記載がみられます。

鳥名木家文書（茨城県指定文化財 鎌倉時代）

この文書では、「商船々、若有海賊之者」とあり霞ヶ浦周辺での海賊行為と、関東管領によりその取り締まりが行われていたことが記されています。

文正草子（御伽草子 室町時代）

鹿島神宮大宮司に仕えた者が「つのをかが磯（鹿嶋市角折）」で塩焼きとして財を成す出世物語で「常陸国に、塩焼きの文正と、申す者にてぞはんべりける」と記述されています。古代では霞ヶ浦内部で行われていた製塩は中世では鹿島灘沿岸で行われていました。

水府志料（地誌 江戸時代）

江戸幕府による諸国の地誌を提出する命をうけて編纂されました。「行方、新治の間にあるもの、是を西浦とよび、鹿島に臨める者、是を北浦といふ」と記述があり、霞ヶ浦を鹿島神宮から見た方向で、西浦・北浦と呼称を分けていたことがわかります。

利根川図誌（地誌 江戸時代）

牛堀（潮来市、旧牛堀町）の記述では、「霞が浦は至って渡り難き海」、波逆浦は「波逆海」、大船津の記述では、「鹿島の神の一の鳥居、海中にたてり」とあり、鹿嶋、潮来までは海と認識されていたと推察できます。

吉田麦翠（俳人）の句碑（安政年間に建立 阿見町阿見神社境内）

句碑に「湖の風も通うて夏木立」とあり、江戸時代末期に土浦入側では湖と認識されていたと推察できます。

航湖紀勝（紀行文、江戸時代）

儒学者藤森洪庵が土浦から船で潮来・鹿島・銚子に遊んだ際の紀行文に「八月廿二日。開帆棉而航霞湖焉」とあり、湖として認識されていたことがわかります。

陸奥日記（紀行文 江戸時代）

江戸後期の商人が深川から下総・常陸・浜街道を経て松島に至り、江戸にもどるまで

の紀行文に「～牛堀といふをすぐれば、いとひろき湖にいづ。これ潮来のやどりの楼よりとほくみえしかすみが浦なり」と記述されています。この記述から当時「かすみがうら」と呼ばれていたことがわかります。

土浦の川口（写生文、明治時代）

長塚節は土浦を訪れ、夜船で霞ヶ浦に遊んだ際の情景を記しています。船頭とのやりとりや、当時の土浦で売られていたワカサギ・サクラエビ・、湖岸のマコモの様子なども描かれています。

考古学（考古資料）から中世の霞ヶ浦を考える

1) 下総型板碑

下総型板碑とは、つくば市平沢を中心に産出される雲母片岩で作られた中世の石造物で、生前供養や追善供養のための卒塔婆になります。茨城県南部から千葉県北部にかけて分布しています。稲敷や千葉県北部には霞ヶ浦の水運を通して広がったと考えられています。関東地方全体では「武蔵型板碑」（埼玉秩父産緑泥片岩製）が主流です。

下総型板碑は石材の産地である県南に多く分布し、周縁部にむかうにつれ減少します。

また、同じ県南でも「筑波」と「稲敷」では数や形状に大きな違い、偏りがみられることから、中世において霞ヶ浦沿岸地域の生産や信仰の地域差を見ることができます。例えば 筑波と稲敷では板碑が出現し、盛行する時期はほぼ同じ 13 世紀後葉～14 世紀初頭で同じですが、中世後半（15 世紀後半～16 世紀）になると筑波地域では板碑が再度盛行するのに対して、稲敷地域ではほとんど見られなくなっています。

2) 古代・中世遺跡の土坑から出土した貝

古代～中世の遺跡から出土した土坑内の貝類をみると、当時の環境が見えてきます。桜川河口部では 10 世紀後半～16 世紀頃までは、汽水域に生息するヤマトシジミが中心であることから、この時期の利用域は汽水的環境にあったと推測できます。考えられます。また、18 世紀の西浦南岸（稲敷当あたり）でも同様に汽水域であった可能性が考えられます。

一方、北浦の海側に位置する鹿嶋市周辺では、海水域に生息するホッキガイやキサゴ類が 18 世紀まで確認されており、この地域が海水環境に近かったことがうかがえます。

さらに、単一の貝種のみが出土する事例が複数みられることから、当時の人々が特定の貝種を選択的に採取していた可能性も指摘できます。



（文責 小川）